

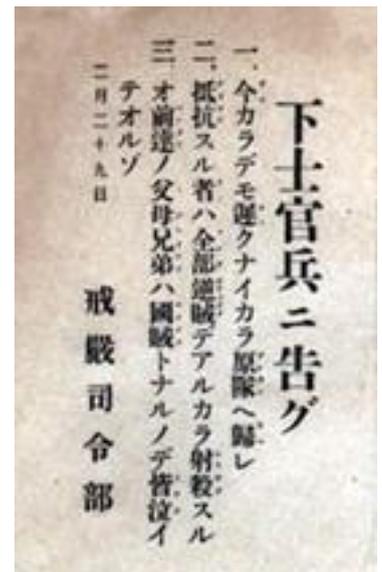
#### (4) 2.26事件の衝撃

事件が起きた日の朝、加藤の家では、加藤を学校に行かせるかどうかが最大の問題で、父母ともに、その日の加藤の登校を控えさせた。当時の東京府立第一中学校は国会議事堂の近くに



あったからである（写真：警視庁中庭を占拠する反乱軍〈1936年2月〉）。

父信一は最初からクーデタには批判的であり、事件に陸軍の野心を感じただけであった。海軍が聯合艦隊を東京湾に集めたという情報が入ると「陸軍の思うようにことは運ばない」といって喜んだ。戒嚴司令官香椎浩平（かしいこうへい）の「下士官兵ニ告グ」（写真：戒嚴司令部が出した布告）が出され、事件の決着が見えてきたときに、「食卓で、その放送を聞きながら、私たちは妹がもらって来た仔猫になにを食べさせて、どの部屋に寝床をつくり、どうい



うしつけをしたらよいかという話をしていた。失敗した反乱の結着があきらかになった瞬間から、事件の全体は、私たちにとって、もはや一匹の仔猫ほどにも現実的ではなかったのである」（『羊の歌』「二・二六事件」）と綴る。

しかし、2.26事件は、加藤の政治に対する態度を決定づけるほどの大事件だった。事件を

起こしたことを称賛されたその一瞬あとには、手のひらを反すように「反乱軍」とされ、「国賊」とされた。その経過を目の当たりにした加藤は、政治というものの恐ろしさを身に染みて知るのだった。

もともと大言壮語を嫌い、徒党を組んで行動することができなかった加藤に、2.26事件によって、「政治」を好まない、という態度がつけられたともいえるだろう。しかし、同時に、「政治」はこちらから近づかなければ、向うから迫って来る何ものである」という認識をもった。

政治に対するこのふたつの認識のあいだにあって、加藤はたえず政治といかなる態度で向き合うかということを考え続けた。安保闘争のときにも、九条の会のときにも、それは変わらなかった。加藤は考え続けたうえで、みずからの政治的態度を決めた。こうして、生涯を通じて、権力の中枢に関与することはなかったし、政治に背を向けていっさい関心をもたない、という態度もとらなかった。

なお、のちのち2.26事件を振り返って次のように述べる。

日本の軍国主義化は、大体合法的手段をとっているのです、たとえば憲法は一行といえども変わっていない。『大日本帝国憲法』のままで、しかもそれは一応合法的な体裁を整えた上で、その内部で変わっていった。だから変わり方がなし崩しなのです。

振り返ってみると、二・二六事件が転機でした。しかし、二・二六事件にしても天から降って湧いたわけではありません。皇道派の活動というのは前からわかっていたわけですから、どこでそれを止めることができたかというのはたいへん難しい問題です。

ある段階をとると、その段階では、「そんなに大したことはないだろう」と思う。一年たつと陸軍はちょっと前へ出る。大きく出たのではないから、そのぐらいなら我慢できると考える。そうするとまた次の年にちょっと先に出る。そういうなし崩しです。日本ではよく「外濠を埋める」という比喻を使いますが、もっと連続的に、無数の外濠を一つずつ埋めていくという感じです。だから阻むのが難しい。(『私にとっての20世紀』岩波書店、2000年)

ここにある「陸軍」を「自民党政権」に置きかえれば、戦後日本の歩みに重なる。